
Deceitful Cinderella

柵阿叫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Deceitful Cinderella

【Nコード】

N4323T

【作者名】

柵阿叫

【あらすじ】

小説力キコというサイトで連載させていただいているもののリメイクです。

自殺志願、快樂殺人狂、偽善、猫耳、自己中心…

嘔吐きが神様の暇つぶし『フェイク』の中でいろんな人とふれるお話。

変わっていく嘔吐きの心。進んでいくゲーム。

変城光の参加理由（前書き）

小説カキコというサイトで連載させていただいているもののリメイクです。

ソフトではありますが残酷、流血表現が非常に多いです。

基本自由に書いているため改行等がばらばらです。

意見やアドバイスがありましたら、是非お願いします。

変城光の参加理由

ずっと夢見てた、誰かに愛されること。

ずっと望んでた、シンデレラみたいな下克上。

…俺は、這い上がる。

皆が俺を羨むように。

「貴方は消滅する。ゲームに負けた」

暗闇に俺の声が響く。

その刹那、赤い飛沫が飛ぶ。

うえ、今風呂入れないのに。

ところどころ既に赤黒くなり、今の飛沫で鮮明な赤に染まった上着に顔を顰める。

今、俺は一つのゲームに参加している。

簡単に言ってしまうえば殺し合いのゲームだ。

自分の欲望を果たすために、誰もが平気で武器を振るい、嘘を吐く。常人であれば眉を顰めたくなくなるようなゲームだなぁ、と頭の隅っこので思う。

俺？

ああ、二つ返事でオツケーしたよ。

バカだなぁ、と我ながら思う。

でも、どんなに下衆と雑ざっても、生き残れば俺が頂点になれるらしいから。

何もせずにダラダラ不満を吐いて生きるくらいなら俺にも出来る方法で這い上がると思うたんだよね。

こういうときに良かったなぁって思うのは、誰一人として俺の安否を心配する奴がいないこと。

「さてと」

頬にまで飛んでいた赤い飛沫を拭い、ふわりと欠伸をもらす。
あーあ…自分で言うのもなんだけど、折角キレイな顔なのになあ、俺。

んむ、疲れたし、一休みついでに俺がこのクソみたいなゲームに参加した理由でも再確認しようかなあ。

だって、最初の目的を見失ったら大変でしょ？

俺が俺である為に、『かわらきうつ変城光』の目的を思い出そうか…

確か、参加を決めたのは2・3日前。

俺には父親、とかいう存在がない。

厳密に言くと俺の父、かわらきあき変城明は俺が小さい頃に事故で死んだ。

その日から一年も経たないある日。

母が新しい父親を連れてきた。

2人ほど血のつながらない兄貴というオマケも一緒に。

そこまでなら、外面のいい俺は、義父とも義兄とも仲良く出来た。

俺が許せなかったのは義父の俺への暴力でも、義兄の女子学生顔負けのいびりでもない。

唯一許せなかったのは義父が、父の兄…つまり俺の叔父だったことだ。

いつもいつも父を悪く言い、アル中で、金使いが荒くて、父に金を借りに来て、煙草臭くて乱暴。

穏やかで真面目で、賢かった父とは似ても似つかない。

許せなかった。

父の場所が汚染されていくような気分だった。

話は変わるが、俺は年甲斐もなくシンデレラに憧れていた。
ただしくは、シンデレラの下克上に。

だから、俺はあいつらの前でも大人しく従順だった。

そんな、ある日。

一人でまったり洗濯をしているとふいに声がした。

「ねえ、君さ“フェイク”に参加してみない？」

「ふえいく？」

聞き返してみる。

ドロボーか何かかと思ったけど、その声がやけに楽しそうだったから。

「んー？神サマが始めた簡単なゲームだよ。」

くすくす、笑い声が響く。

もちろん、俺のものではない。

「ゲーム？」

「うん、ゲーム」

声の主が頷いた（気がする）

不思議と、声だけで仕草がわかる（気がする）

「…どんなゲーム？」

俺の質問にうーん、と考えるような声が聞こえる。

「神サマから贈られる能力、“ネメシス”を使って他の参加者や邪魔者…“ディーバ”と呼ばれるものを倒したり、逃げたり。

とにかく、生き残ればいいよ。一人だけしか、生き残れないけどね。

ただ、生き残れば、どんな大それた願いだって一つだけ、叶うよ。」

声の主が笑んだ（気がする）

「なら…」

「但し」

なら、参加しますといいかけた言葉を遮られる。

「それなりの代償が要るよ。」

ゆつたりと、焦らすような口調。
怪談とかやらせたら上手そう。

「代償？」

「そう。現世^{うつしよ}での存在」

「どういう意味です？」

「ゲームに負ければ君は存在していなかったことになる。
ただ、それだけのことだよ。」

簡単に言うなあ。

普通のヒトならここで引いちゃうんじゃない？とか思う。
けど、俺に悩む必要はない。

こんな旨い話、裏が無い方がおかしいと思う。
けど、チャンスだから。

「参加する。」

多分、即答。

「うん」

謎の声の返事も早かった。

まるで、俺が参加するのを知っていたみたいに。
チリ、と右腕…の二の腕の辺が痛んだ。

「…？」

目を向けると

「え、なにこれ」

そこには、覚えの無い道化師のタトゥー。

ピアスとか、タトゥーとかしない主義だったんだけどなあ。
なんて苦笑がもれる。

「ああ、ごめんね驚かせた？そのタトゥーはね、フェイクの参加者
だっていう証明なんだ。

これで、君の存在は現世から消える。

次に君がここに来るのは、君がフェイクに勝ったときだよ。」

謎の声、若干苦笑交じり。知らんけど。

てか、おお、俺もう参加者なんだ…ってあれ？

「今俺透明人間？」

「んー、まあ、そんなとこ。参加者同士は見えるけどねえ」
うつわ、めんど。

新しい服買えないじゃんね。

「さて、変城光くん」

謎の声は若干声のトーンを上げた。
って、おい。何で俺の名前知ってるの？

「あ…いや、今からはこう呼ぶべきかな？『^{はいかぶ}灰被り』くん」

ああ、コードネーム的なのがあるのね。
いいね、灰被り。シンデレラじゃん。

「最後に一個だけ。君のネメシスはね。『嘘』だよ」

わかるかな？そっぴい残して気配が消える。

『嘘』ねえ…

「…わかんねえよ、バーカッ！！」

今は誰もいないだろう空間に叫ぶ。
全力で叫ぶ。

多分、素の俺の最後の言葉。

「さあて、と。」

ふう、と一息。

へらり、と口元に笑みを作る。

そう、腕で笑んでいる道化師と同じ笑みを。

第二話に続く。

変城光の参加理由（後書き）

こんな感じで始まりました。
ぐだぐだです。

いんにちは、おようなら。(前書き)

サブタイトルが思いつきませんでした。

こんにちは、さようなら。

慣れ親しんだ二セモノの笑み。

吐きなれた嘘。

それを全部武器にして、俺は這い上がる。

俺だけの幸せの為に。

そのために皆には、足を切り落とした義姉になってもらおうか。

…つまり、俺の目的は『下克上』

俺が幸せな世界。俺だけが幸せな世界。

ああ、けど、シンデレラの隣には王子様うんめいのひとが必要だなあ…

とかぼけっと考えてたら、なんか太陽の光が覗いてるんだけど。

あー、朝かよ。朝だとこの服、悪目立ちするんだよなあ。

ぶつぶつ文句を言いながら立ち上がる。

会った奴片っ端から消してると疲れる。

ああ、けど謎の声（3日目の今でも正体わかんない）の言ってた俺のネメシス『嘘』についてはわかったなあ。

単純な話、俺の吐いた嘘が本当になるっばい。（正しくは信じ込ませる、かも）

…死ぬ、とか死ぬとかは実現しないっばい。けど、消えるとか消滅するとかは効く。

基準がよくわからん。神様意味不。

多分肉体が無いから、死は無理なんだろうと思う。

…けど、そしたら俺のところに飛び散ってる赤い飛沫は何？って話に

なるんだがね。

フェイクの期間は現世の時間で一週間。

で、ここも現世と時間はリンクしてるからここでも一週間。

七日間。168時間、10080分。

いける、と思う。

今は三日目の朝。

あと四日。96時間、5670分。

幸いなことに俺は今の今までディーバ、とやらには会ったことがない。

他の参加者達はアホばかりだし。

にこにこと貼り付けた笑みに釣られてホイホイ俺の嘘を信じ込む。

…結局そういうことなんだよねえ。

この世はアホばかり。

けど俺もアホだと思う。

自分の力で這い上がるのを諦めた時点で多分そうなんだろうなあ。

まあ、同じアホなら笑ってる方が幸せだと思うの。

だから、にこって、にやって、へらって。

貼り付けた笑みをうかべるんだ。

…ところでそろそろ本格的におひさま見えてきた。

あー、移動せねばー、…めんど。

よいしょ、と腰をあげた瞬間、首元にひやりとした感覚。

ああ、これ刃物の感触だなあ、懐かしい。

まあ、懐かしい理由はまた今度。
今説明してたら、俺死んじゃう。

「あ、あのっ」

「動くな」

作り声（ふんわりめ、声変わりしてなくてよかった！）を使って
あげた第一声をぴしゃりと遮られる。
ちよつとびっくり、女性の声だ。

「あ、あのっ、ぼくっ…、あ、の放してください」

おどおどした口調で言う。

これでしゃべると中学生に見られるんだよねえ。
れっきとした高校生だから、17歳だから。しよた違うから。
俺の口調に警戒が緩んだのか首元からナイフが離れる。

おねーさ…おばさんかただけどおねーさん（仮）
そんな簡単に油断しちゃ駄目だろう。
そうやって油断するからこの世界の連中はアホになっちゃうんだ。

「ああ…すまない。ディーバかと思ったんだ。」

自由になったのでおねーさん（仮）の方を向く。
わお、結構美人さん。背高いし。

あ、俺？自慢じゃないけど小さいよ？
157cmだよ、この背のおかげで更に中学生に見られるよ。

別に悲しくねえもん。

…ちなみにこれ、全部俺の思考回路。
30秒間でこんなに考えられるんだ。

「すまないな…本当に…、怪我は無かったか？」

おねーさん（仮）は俺をじっとみつめてから頭を下げた。
おお、結構勇ましい口調だね。

「はいっ…平気でしたっ。あ、あの…ディーバかと思ったって…ど
ういう意味、ですか？」
僕…、そんなに、変ですか？」

おどおど、びくびく、傍から見れば気弱な少年…だと思う。

「いや、違う。君が変なのではなくて。ディーバも黒ずくめの人型
なので…。はやとちりした。」

ふむ、ディーバって人型なんだ。

「あ、あの…参加者同士ってことは…ぼくたち、戦わなくちゃいけ
ません…か？」

消え入りそうな声で言う。

「いや…、私はあまり戦いたくないんだ。よかつたらこの場はお互
いに見なかったことにしないか？」

多分おねーさん（仮）は俺が気の弱い奴だと思って提案したんだ

ろくなあ。

けど残念。俺って結構気が強いんだよね。

「わかり、ました。ぼくも戦いたくないので…」

俺の言葉に少しほっとしたような表情をつかべるおねーさん（仮）けど、残念。俺の言葉はまだ続いているんだ。

「…だから、俺を信じてくださいね？ 貴方はここでゲームに負ける。つまり、消滅するね？戦ってはいないでしょう？」

にこ、と笑めばおねーさん（仮）は困惑したような表情でぼけつと俺を見つめる。

ん？効いてない？とか思ったけど、ふわり、と消えて赤い飛沫が散ったから。

ああ、消えたんだ。とか思った。

なんか、このゲームに負けた人は、死ぬって言うより消滅するに近い気がする。

多分、無になるんじゃないかなあって思う。

結構怖いよね、自分が、変城光^{かわしろのひかり}って存在が虚無になるのって。

ま、俺は生き残るから関係ないけどね。

…けど、消えるならこの赤黒いものを残していく必要はないと思うんだ。

もっとファンタジックに、殺しても…消しても罪悪感のないようにしてほしかった。

神サマって結構意地が悪いと思う。

さあて、行こうかな…なんて思ったとき。

「随分と、汚れてるみたいだねえ？」

…なんか嫌味つたらしい声が背後からした。
うっざ。汚れちゃうんだから仕方ないだろ。

心の中では悪態をつきつつ、表情には出さずに振り向く。

…わーお。

目の前に立っていたのは、金髪（ないわあ）に黒いスーツの夜の
人っぽいおにーさん。

なんですか？その胸元の赤い薔薇は。かっこつけちゃったの？ねえ？

「へえ、学生さんくらい？」

おにーさんは俺の思考なんて知るわけもなく、キザったらしく笑
む。

やめれ。本当にやめれ。笑っちゃう。

「え、と、はい。」

警戒の色を濃い目にだす。

それに気付いたらしく（いや、気付かなかつたらおかしいけど）お
にーさんは笑っていった。

「ああ、僕は水面一応^{みなも}、よろしくね」

第三話に続く。

こんにちは、さようなら。(後書き)

展開が速いのはご愛嬌。

おねーさん(仮)の登場時間が短すぎる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4323t/>

Deceitful Cinderella

2011年10月9日03時52分発行